

金沢まちなか区域における歴史的木造住宅の改修・改善に関する研究

A study about the Repair and improvement of the historical house in the Kanazawa old castle area.

宮本 敦史^{*1}, 増田 達男^{*2}, 川上光彦^{*3}, 永野紳一郎^{*4}

Atsushi MIYSMOTO, Tatsuo MASUTA, Mitsuhiro KAWAKAMI, shinichiro NAGANO

本研究は、金沢市の旧城下域に残る歴史的住宅を対象としている。これらは、城下町の歴史を継承する貴重な建築資産であるが、年々減少の一途をたどっている。これらの継承・活用を促進する為、建物屋内の改修・改善経緯について調査した。その結果、改修・改善は、主に水周りを機会として始められ、台所土間の床上げ等を伴いつつ、食事・団らん空間の充実を中心として進められたことが明かとなった。

Keywords Historical house , Kanazawa , Repair , Improvement , Preservation
歴史的住宅、金沢、改修、改善、継承

研究背景・目的

金沢の旧城下区域に現存している昭和 20 年以前に建築された木造住宅（以下、歴史的住宅）は城下町の歴史的景観を継承する貴重な歴史資産であり、これまでも金沢市は歴史的景観を諸条例や事業によって保全してきた。しかし、これまでの調査研究により、全体数の減少や空き家化の進行が明らかになってきている。

近年、改修・補修を前提とする歴史的住宅はサステイナブル建築であることが認識されつつある。歴史的住宅を活用したコンパクトシティの構築はこれからの市街地形成の一つの形態であると再認識されている。また、金沢においても、北陸新幹線の開業や世界遺産登録を背景とした歴史的景観の保全が求められてきている。

したがって、金沢における歴史的住宅は今後、維持・継承を目的とした改修が増加する事が想定される。安易な改修は歴史資産としての価値の損失につながる恐れもあることから、歴史的価値を保持し得るような改修・

改善工事の手引きが希求されている。

そこで、本研究ではこれまで調査が充分進んでいない金沢まちなか区域における歴史的住宅の屋内空間について改修・改善の実態から手引き作成の基礎的な知見を得ることを目的としている。

調査概要

本研究の調査データは金澤町家研究会の協力を得てデータを作成している。調査地区は図 1 に示す、金沢の旧城下域であるまちなか区域としている。調査対象は 2005 年度の金沢都市計画基礎調査により明らかになった 5436 軒の内、1/25 無作為抽出した 217 軒としている。これらを訪問調査し、調査協力が得られた 29 軒についてプレアンケート調査、実測調査、ヒアリング調査をおこなっている。

1. 改修・改善理由と場所

現在まで行われた改修・改善の主な理由及び内容と、箇所関係を整理したものが表 2 である。改修理由は「時

*1 日本再生住宅機構（株）・工学修士 Nihonnraisei jyuutaku kikou Corp, M.Eng
*2 金沢工業大学建築系 教授・工学博士 Professor, Kanazawa Institute of Technology, Dr.Eng
*3 金沢大学 Professor, Kanazawa university, Dr.Eng
*4 金沢工業大学建築系 教授・工学博士 Professor, Kanazawa Institute of Technology, Dr.Eng

代の変化への要求」が最も多く、「利便性の向上」が続いている。その他は少数の改修である。場所としてはトイレや風呂、台所といった水周り空間が主に改修・改善されてきている。また、「時代の変化への要求」では茶の間や2階居室といった日常生活で頻繁に使われる空間の仕上げ変更が行われている。また、通り庭や1階前面の揚げ床が見られ、室の拡張が認められた。小数ではあるが高齢化にともなうバリアフリー工事が水周り空間で行われている。

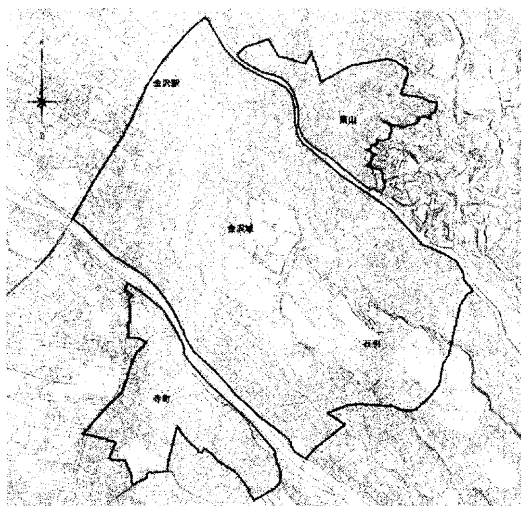


図1 研究範囲

表1 改修・改善の理由と場所

理由	改修内容	場所																
		屋根	外壁	1階前面	玄関	トオリニワ	廊下縁側	階段	ミセノマ	チャノマ	座敷	1階居室	便所	風呂	台所	吹き抜け	2階居室	納戸
a: 高齢化によって	1: 段差解消												1	1				
	2: 便所の洋式化											2						
	3: 場所移動														1			
	4: 使用材の変更											1			1			
b: 時代の変化への要求	1: 新しく室を設ける													3			1	
	2: 便所の洋式化											2						
	3: 床の仕上げ変更				1		2		3			7	1	3			4	
	4: 壁の仕上げ変更				4		2	2	5	3	1	7	2	2			6	
	5: 天井の仕上げ変更						1		1	1		1		2			2	
	6: ユニットバスの導入													5				
	7: 使用材の変更	1	1		1		1	1	1	1	1	1						
	8: 間仕切りの変更																	1
c: 利便性の向上	9: 新しく室を設ける					1		1	1					5	1	3	1	1
	6: 床の仕上げ変更										1							
	7: 壁の仕上げ変更																	1
	8: 天井の仕上げ変更																	1
	1: 揚床					5				1			1		4			
d: 老朽化により	2: 室の拡張					3								2			1	
	3: 動線変更							1										
	4: 場所移動											3		4				
	5: キッチンへの導入														6			
	1: 仕上げ変更		6	4			3											
e: 店舗空間の利便性向上	4: 床の仕上げ変更								1									
	3: 壁の仕上げ変更								1									
	5: 天井の仕上げ変更								1									
	1: 室の拡張			1					1									
	6: 動線変更				1													
	2: 場所移動												2					
	7: 用途変更													1			1	
	8: 新しく室を設ける												1					
f: 住空間の改善	1: 間仕切りの変更																	1
	2: 室の拡張				1													1
	3: 用途変更																	1
	4: 場所移動																	1
g: 工事に伴い	2: 仕上げ変更		1	1	1				1	1								
	1: 場所移動												4		2			
h: 道路拡張に伴い	1: 室の縮小			2														

凡例：□ 1～2件、□ 3～4件、■ 5件以上

注釈：揚床は、土間を板床にあげる事である。

2. 改修・改善年代

建物の改修・改善工事は主に戦後にはじまっている。昭和30年から50年代前半までは全体の空間で改修・改善工事が行われている。それ以後はほとんど水周り空間において行われており、設備更新の工事が行われている。平成期に入ってから外回りの補修工事が多くみられる。

3. 居住者の意識

プレアンケート調査により、表1、2によって居住者の建物への不満やこれからの改修希望点を示している。

建物への不満点において最も回答数が多かったものは「耐震性能が劣っている」の10件(13.4%)である。しかし、「建物が歪んでいる」と回答したのは6件(8.1%)であることから、耐震性能が劣っていると感じているのは、建物が歪んでいるからではなく、建築年数が古いことや、伝統工法で建築されているからではないかと推察される。

「住宅規模が狭い」と「間取りが使いにくい」と回答されている背景には町家系住宅の建築面積の狭さが要因として挙げられる。室構成は狭小である事から典型化しているため、この両者は相関していると考えられる。

また一方で、間取りの使いにくさは歴史的木造住宅特有の室配置と、現代住宅の室配置との違いの現れとみなされる。居住者は歴史的木造住宅特有の室配置ではなく、現代の住まい方に適合した新たな室構成を望んでいることが推察される。また、全体的に不満点が挙げられており、改修・改善工事後も住空間にたいして何らかの改修・改善要求があると言える。

今後の改修・改善工事の希望点として水周り空間や、床、外回り空間についての改修・改善希望点が挙げられた。特に、「屋根」や「その他」の回答数が多く、居住者が高齢であることから、自分の存命中の維持・補修程度の工事を希望している。また、水周り空間については、設備更新時期を迎えている事や、新たな設備の導入が進んでいる事から、これに伴う回答であると言える。

表2 建物への不満点

不満点	件数 (%)
通風が良くない	2 (2.7%)
日当たりが良くない	6 (8.1%)
断熱性が良くない	3 (4.1%)
水周設備が悪い	3 (4.1%)
住宅の規模が狭い	8 (10.8%)
段差が多く危険	3 (4.1%)
気密性がよくない	3 (4.1%)
外壁が傷んでいる	3 (4.1%)
電気設備が良くない	0 (0%)
間取りが使いにくい	6 (8.1%)
内装が傷んでいる	5 (6.7%)
建物が歪んでいる	6 (8.1%)
天井が狭い	5 (6.7%)
耐震性能が劣っている	10 (13.4%)
防火性能が劣っている	4 (5.4%)
とくにない	4 (5.4%)
その他	3 (4.1%)
合計	74 (100%)

表3 今後の改修・改善希望場所

改修・改善希望点	件数 (%)
トイレ	4 (13.3%)
台所	2 (6.7%)
床下	3 (10%)
床	4 (13.3%)
駐車スペース	0 (0%)
居室	1 (3.3%)
玄関	0 (0%)
屋根	5 (16.7%)
外壁	3 (10%)
風呂	3 (10%)
その他	5 (16.7%)
合計	30 (100%)

4. 武士系住宅の改修実態

武士系住宅では、室の配置の変更もほとんど行われていなかった。比較的若い居住者が行った改修・改善工事では、2階居室の洋室化がみられた。これは若年者の同居による室要求であるが、他の武士系住宅ではみられなかった事例であり、注目すべき点である。また、台所と茶の間のDK化がみられた。水周りについては、下水道工事を機会とした水洗化が行われ、仕上げの変更が見られた。便座の洋式化は近年設備更新した家屋でみられた。

これらより、武士系住宅は元々専用住宅として建てられていることから、室配置の変更や居住スペースの拡張の必要性が無かったと推察される。しかし、社会的に住環境の向上が進む中で、子供の居住環境がベッドや机といった椅子座へ移り変わってきていることから、若年者の居住には洋室化が行われている。また、DK化は動線の簡略から当然の改修といえ、台所と茶の間が隣接していることから容易に改修が行うことが可能であった。水周り空間は、建築当初から台所以外は床であったので、仕上げ変更が行われる程度であった。台所は設備の向上や使い勝手不便の理由から揚げ床が行われている。今回の調査ではバリアフリー工事や2世帯居住といった改修・改善工事は認められなかった。

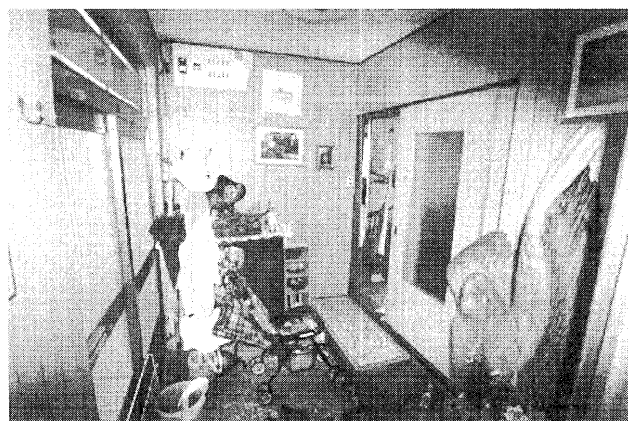


図2 武士系住宅の玄関改修事例



図3 武士系住宅の台所改修事例

5. 町家の改修実態

町家系住宅では、建築面積の狭さや建ぺい率の高さから居住スペースの改善に関する工事がみられた。下水道工事を機会とした通り庭の不必要から、7割弱の建物で通り庭の揚床が行われていた。また、間口の4間以上の家屋や店舗を有している家屋は通り庭が現存している。通り庭の滅失は汚物の運搬通路や後部の土蔵への通路としての利用がなくなったことが一因として推察される。前部下屋空間の室の拡張も認められた。

下水道工事に関連して、通り庭奥に設置してある水周り空間は、室の奥に移設し、揚げ床が行われて利便性の向上が行われている。また、茶の間が後部へ移動して台所に隣接するように室用途の変更が行われている。後部ではなく、ミセノマに台所やトイレ等の水周り空間を配しチャノマの移動を行わなかった家屋も少数ではあるが見られた。16戸で風呂の設置が行われており、3戸がいまだに銭湯への通い湯をしている。

武士系住宅と同様に、子供室は壁を化粧合板やクロス張りに仕上げ変更を行っているものも多く見られた。しかし、畳のままである家屋が多くみられ、椅子座への変更がそれほど顕著には見られなかった。

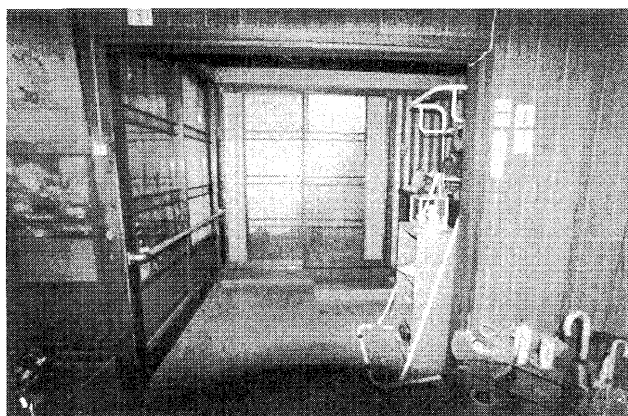


図4 町家系住宅の通り庭改修事例



図5 町家系住宅の通り庭改修事例

まとめ

歴史的住宅の改修・改善は、水周りの改修をきっかけに、居住空間の規模拡大やパブリック空間の設え等が認められた。しかしながら、これらの改修・改善工事は居住者の住要求を十分に満たしたわけでは必ずしもなく、いまだに慢性的な不満をかかえているのが実状である。工事費の負担が大きい上に、高齢化に伴う諦観もまた認められる。したがって、限られた負担の中で、効果的な改修・改善手法を求める姿勢が必要となろう。

今回の調査研究でその十分な手がかりが得られたとはとても言えないが、上記の結果からは、今後の住改善に際して、少なくとも次の点が示唆される。

すなわち、台所や浴室等の水周り空間の性能確保が不可欠であり、主婦の家事環境の改善を含む台所の整備に関連する住改善がまず必要であろう。土間の上げ床化によるキッチン空間の設えと、それに伴う食事・団らん空間としてのパブリック空間の充実である。具体的には、台所とパブリック空間の隣接が大切であり、さらにDK化への利便性向上が挙げられる。しかしながらプライバシーの確保については、とくに強い影響はうかがえなかったため、むしろ室規模や動線面を大切にしたい改善が必要であろう。

以上のように、今後の住改善には、現代生活への対応と利便性の確保を挙げることができる。しかし、住改善を行うだけでは歴史的住宅の継承・活用がはたされたいはず、歴史性の維持・保全が伴わなければならない。

しかたがって、例えばDK化に伴った椅子座化を挙げれば、これは必ずしも洋室化を意味するとは限らない。歴史的な内装を維持しつつ床座の方法をとることも可能であるかもしれない。個室においても、最小限の変更にとどめて、畳の床座や土壁の内装を活かした現代的な和風の設えを工夫していくことが大切であろう。

なお、当報告の内容については、報告者の責任でとりまとめている。

<参考文献>

- 1) 増田達男:「既成市街地内居住地の形成過程に関する研究」、1990年10月
- 2) 萩野綾、亀井佑香、中野明:「京町家における生活変化に伴う改修パターンの分析」、日本建築学会学術講演梗概集、2006年9月
- 3) 島村昇:「都市住居史論」、神戸松蔭女子学院大学・短期大学学術研究会、2003年7月
- 4) (財)京都市景観・まちづくりセンター:「京町家の改修 -住みつづけるために-」、2003年1月